バリバリのテレビマンが保育士さんになったわけ

人生100年時代の歩き方

60歳以上の保育士さんが増えている。慢性的な保育士不足もあるが、定年を迎える60歳にあたって「子どもと関わる仕事がしたい」という人が増えているのも要因だ。この春から「ナーサリーホーム小仲台」（運営・在宅支援総合ケアーサービス）で働く進藤昭人さん（61）もその一人。前職はテレビ制作会社のディレクターだった。（インタビュー＝加藤広栄）

園児の笑顔に元気をもらう

「虫捕り、ウルトラマンごっこ、紙飛行機づくり。若い女性保育士さんが苦手とする分野で活躍できます」

保育施設の性別・年齢層割合

年齢	割合	うち男性	うち女性
30歳未満	32.9	1.6	31.4
30代	25.6	1.4	24.1
40代	20.5	0.4	20.1
50代	14.4	0.2	14.2
60代	5.7	0.3	5.4
70歳以上	0.7	0.1	0.6
計	100	4.0	95.8

※単位は%。独立行政法人福祉医療機構（2018年）

60歳以上のシニア保育士は6%

定年退職者にはうってつけの職場

福祉医療機構のデータによると、保育施設で働く60歳以上の割合は6・4%。うち70歳以上は0・7%いる。

ただ、気がかりなのは、定年退職者にはうってつけの職場だと特に若い女性保育士さんが苦手としている分野で活躍できます。テレビマン時代の小道具づくりの経験から遠くに飛ぶ紙飛行機をつくったりもできますし、保育士という仕事は定年退職者に向いていると思いますね」

勤め人なら退職金も入っているはずで、「ある程度、生活資金に余裕があれば保育園で働くのは悪くはありません」と進藤さんは笑う。

「私は住まいもこの近くで、ずっと地元に貢献をしたいと考えていました。とりあえず年金が出る65歳までは保育士を続けるつもりですが、ひょっとしたら70歳くらいまでいくのかも。子どもたちには毎日驚かされてばかり。昨日できていなかったことが今日はできているのが当たり前で、将来ここから日本や世界を担う子どもが出るかもしれません。もっとも、園児のお父さんの年齢が27歳と知った時は、『もうおじいちゃんじゃないか』と少なからずショックを受けましたね（笑）。まあ、実際にこの年になれば、孫が何人もいる同級生もいますしね」

記者もセカンドキャリアを考える時期に差し掛かっている。

「シニアですが、新人として、年下の先輩方々にいろいろ教えてもらいながら楽しくやっています。新しいことを学ぶこと、新しい経験・体験を楽しく感じています。二毛作人生、なかなかいい滑り出しです」

『サンデーモーニング』元ディレクターだった

「忙しいけど、とにかくテレビの仕事はおもしろかった。TBSの『サンデーモーニング』のディレクターだった頃は、電話一本で誰とでも会える士』でした」

きっかけは、取材先で出会った保育士の働く姿だったという。

「もう10年くらい前のことです。大学生向けの発達心理学のDVD制作の仕事で保育園を長期に取材したのですが、子どもたちを叱ることなく諭したりする保育士さんたちの姿を見て、なにか崇高な仕事だと感じました。その時は保育士になろうなんて思ってもいませんでしたが、60歳の定年を迎えるにあたって、ふとあの時の記憶がよみがえってきた。ずっと頭の片隅にはあったんでしょうね。継続雇用で会社に残ることもできましたが、後輩たちに煙たがられるのも嫌ですし、給料だって同じ仕事をしても新人並みに戻る。『だったら、本当に新人に戻って仕事をしたらいいんじゃないか』と思いついたのです」

資格試験はどうクリアしたか？

とはいえ、保育士の試験合格率は20%前後という難関。進藤さんはユーキャンの通信講座や本屋に並んでいる過去問で猛勉強したという。

「私の場合は事件や事故が起こるたび、付け焼き刃的ではありましたけど、その分野について勉強する習慣が付いています。今ならきっと、ロシアとウクライナについての資料を漁っていたでしょう。その意味で、60歳からの試験勉強ではありましたけど、勉強自体はあまり苦ではありませんでした。それと保育士の試験には音楽の実技もあって、若い頃からギターをやっていたのが役に立ちました。まあ、自分では押尾コータローを気取って園児の前で演奏してみるのですが、お遊戯の伴奏にはピアノの方が向いているかもしれません（笑）」

現在は、規則正しく朝の7時前に起床。月～金曜（時には土曜保育も）の早番・遅番2交代制のフルタイムで、正社員としての雇用だ。

勤務先はJR稲毛駅すぐの「ナーサリーホーム小仲台」。医療的ケア児も登園できる保育園のため、看護師を含め25人ほどが働いている。進藤さんはその中でも下っ端の新人だ。

「今は年下の〝ベテラン保育士さん〟と共に4～5歳クラスを担当しています。一緒に働いている保育士さんが素晴らしい方ばかりで、『そんなに細かいことまで考えて保育しているのか？』と日々感心してばかりです。私の場合、保育士養成学校などに通わずに来ているので、実践面で弱いことを自覚しています。社会経験が豊富だったとしても、ここではあくまで新人ですから、すべてイチから教えてもらっている感じです」

そう言うと、進藤さんはかぶっていたバンダナを外して頭をなでた。

実は独身で子育て経験が全くない

そんな進藤さんは「テレビの仕事が楽しすぎて」といまも独身で、子どもを育てた経験もない。とはいえ、だからこそ子どもに関わる仕事をしたいと思ったのかもしれない。

60歳といえば、定年退職を境に今後の人生を考える時。やり甲斐や社会貢献の思いから仕事を選ぶ人も多く、厚労省によると、資格を持っていない人も含め60歳以上の保育士希望は毎年増えている。

もちろん、男性保育士やシニア保育士が増えることは園児たちにもメリットがある。

「保育園は圧倒的に女性職員の割合が高い職場ですが（全国平均で95・8%が女性）、男の私は子どもたちと虫を捕ったり、あるいはウルトラマンや怪獣ごっこをしたりと特に若い女性保育士さんが苦手としている分野で活躍できます。テレビマン時代の小道具づくりの経験から遠くに飛ぶ紙飛行機をつくったりもできますし、保育士という仕事は定年退職者に向いていると思いますね」

勤め人なら退職金も入っているはずで、「ある程度、生活資金に余裕があれば保育園で働くのは悪くはありません」と進藤さんは笑う。

「私は住まいもこの近くで、ずっと地元に貢献をしたいと考えていました。とりあえず年金が出る65歳までは保育士を続けるつもりですが、ひょっとしたら70歳くらいまでいくのかも。子どもたちには毎日驚かされてばかり。昨日できていなかったことが今日はできているのが当たり前で、将来ここから日本や世界を担う子どもが出るかもしれません。もっとも、園児のお父さんの年齢が27歳と知った時は、『もうおじいちゃんじゃないか』と少なからずショックを受けましたね（笑）。まあ、実際にこの年になれば、孫が何人もいる同級生もいますしね」

記者もセカンドキャリアを考える時期に差し掛かっている。

「シニアですが、新人として、年下の先輩方々にいろいろ教えてもらいながら楽しくやっています。新しいことを学ぶこと、新しい経験・体験を楽しく感じています。二毛作人生、なかなかいい滑り出しです」

「ヨガの先生による子ども向けヨガ授業などもあって、子どもに交じって軽い運動をさせてもらっています。定年退職した直後は、なぜか体のあっちこっちにガタがきたのに、規則正しい生活に戻ったいまはむしろ健康的。ヨガで子どもたちはなんであんな形になれるの？　私も子どもの頃はあれくらい柔軟だったんでしょうけど、やはり子どもってすごいですよ」

つか」だ。